

〈論説〉

プラグマティズムと革新主義の時代  
 ——ウィリアム・ジェームズの生理学的心理学——

岡 寄 修

I. レッセ・フェールから革新主義へ

ブランダイス・ブリーフの意味

20世紀のはじめ、Lochner v. New York 事件において、連邦最高裁が、契約自由の原則を楯にニューヨーク州労働時間規制法を違憲と断じてからほどなく、当時まだ弁護士であったルイス・ブランダイスは、Muller v. Oregon 事件において、ある書面を最高裁に提出している。これが、「ブランダイスの趣意書 Brandeis Brief」として世に知られるものである。これは、洗濯作業場での長時間労働が母体の健康に悪影響を及ぼすことを科学的に示すため、全米消費者同盟の助力により医学報告と政府報告とを入手して作成されたものである。この事件で、最高裁判は、オレゴン州議会の作った労働時間規制法を合憲と判断した。女性の身体構造と母親になる役割を考えると、女性に対する長時間労働は、それに重大な影響を及ぼすとし、立法により女性の健康を守ることは、公的な保護とケアの対象となりうるもので、長期的な視点から見れば、それが国益にも適うとした<sup>2</sup>。

この趣意書の科学性がどれほどのものであったかについて、今では辛

プラグマティズムと革新主義の時代

辣な批判もある。<sup>3</sup>それはともかく、このブランダイスの趣意書が象徴していることは、当時支配的であったレッセ・フェールの経済思想と対抗し、社会改革の推進に向け、エリートの専門科学者と経験的データを駆使しようとした、革新主義の姿勢である。貧困や不平等を個人の不埒のゆえとせず、それを社会的な問題として位置づけ、社会科学により解決可能と考える革新主義の姿勢が、<sup>4</sup>ここに示されている。数年前のロックナー事件では、やはり同様の労働時間規制法に最高裁が違憲判断を下していたことを考えれば、この事件でも規制法が違憲と断じられても不思議はなかった。もちろん、この事件で科学重視の姿勢が功を奏したと一概には言えないが、大方の予想に反し、このケースの結論はロックナー事件の場合とは対照的なものとなった。

アメリカにおいても、こうした科学重視の姿勢はさほど昔からあったわけではない。それが始まったのは南北戦争前後のことであり、それがいっそう顕著になるのが、いわゆる革新主義の時代 Progressive Era においてである。

## 19 世紀末の時代状況

南北戦争後のアメリカでは、産業社会への変貌がとりわけ急速かつ顕著な形で表れた。産業の発達に伴い鉄道会社をはじめとする大企業が次々と誕生し、電信などの通信施設も整えられ、全米が巨大なネットワークで結ばれるようになった。こうした急激な変化に伴い、それまでアメリカを支えてきた自由主義の伝統的価値観が揺らぎ始め、労使間の争いが各地で頻発するに到った。

この時期、レッセ・フェールの思想に伴い資本主義が隆盛するに到ったため、それが富裕者へのえこひいきとして非難されがちになってきた。だが、このレッセ・フェールの思想は、アメリカの思想では 19 世紀前半アンドリュー・ジャクソンの時代から、自由主義思想として民衆

の間で受け継がれてきたもので、南北戦争後になっていきなり富裕者の武器と化したわけではない。そのように見えるのは、産業社会の到来とともに顕在化した社会主義思想と、それに脅威を抱く保守主義者との緊張が、世紀末に高まった事情がある。

1880-90年代には、農民、労働者、資本家の利害対立が顕著となり、マルクス主義に加えキリスト教社会主義も資本主義に批判的な動きを見せた。資本主義社会の生み出した不平等に対し、階級闘争、労働者の組織化、産業界での労働争議が当時の社会問題となり、この問題を社会主義的な手法で解決しようとする試みが、単なる可能性の問題ではなく現実的な問題としてアメリカに初めて現れた。

この問題に対する調停役として、中産階級の中で社会の動きに批判的な見解を持つ者たちが、さまざまな議論を展開した。課税対象を土地だけに限定しようとしたヘンリー・ジョージの単一税論や、キリスト教社会主義、エドワード・ベラミーが提唱した愛国主義的な社会主義などがその一例である。1890年代には、人民党 Populist party が農民、労働者、急進主義の中産階級を結び付け、政府の力、人民の力を活用し、アメリカから抑圧、貧困、不正義をなくそうとする計画を打ち出している。

こうした一連の動きに資本主義の擁護者が対抗策を打ち出し、自由主義社会においては、個人が自らの財産として労働力を持つという考えを基礎に、古典主義政治経済学、つまりレッセ・フェールの考えを強調するようになった。アメリカがヨーロッパの国々と違うのは、誰もが富を獲得するチャンスを手にできるという点であり、これが維持される限り、平等社会に向けた特別なプログラムは必要ないと彼らは考えた。これに対し労働側は、歴史的な変革を訴え、市場の規制を求めるとともに、労働争議を合法化すべきであると主張した。

1873-77年の景気後退とストライキで、労使双方の動きは第一のピークに達する。第二のピークは、1885年の景気後退の際に現れた。自由労働を掲げる労働騎士団は急速に成長し、1886年のヘイマーケットは

暴動に発展した。全米で8時間労働を達成するためのデモが展開された。だが、こうした動きに対し、世論は主に労働側に対する拒絶反応を示し、1888年には反労働運動の動きが強まってゆく。

19世紀最後のピークは90年代の半ばに訪れる。1893-97の景気後退の中で94年のプルマン・ストライキが起き、94年には、計画的にインフレを起こすべしと主張したジェイコブ・コクシーに同調した「コクシー軍の行進」が大規模に行われ、さらに人民党の隆盛と96年の大統領選挙運動などを通じ、不安と緊張が高まった<sup>7</sup>。

## 「金ぴか時代」のビジネスマン

南北戦争後のアメリカは、「金ぴか時代 the Gilded Age」とも呼ばれる。そこには、19世紀前半のアメリカを牽引してきた南部の綿花経済に対し、北部の産業資本家がアメリカ史上初めて経済を支配する地位に立った変化を示す意味も込められている<sup>8</sup>。この変化に対応し、当時のビジネスマンは、自らのやり方を正当化する社会哲学を必要とした。彼らが求めたものは、現状維持の正当化である。時代の風が自らになびいていることを背景に、レッセ・フェールの思想を支持し、政府がビジネスの規制に動くことに、さらに、特定階級の利益を生むために政府を利用する「クラス立法」に、彼らは強く反対した。その背後には個人道徳を重視する時代であって、他人を頼って富を得ることに対する強い反発があった。そこでは、ビジネスで成功するためには、それに特有な徳と能力とを身につけることが不可欠とされた。このため、有能にして勤勉であり、集中力と忍耐強さを併せ持つことが奨励された。成功者にはこうした特徴がみられるのに対し、失敗者はそれを欠く傾向があったため、敗者は生来的に怠惰で弱い性格に作られたものとみなされた。しかも、「天は自らを助ける者を助ける」というサミュエル・スマイルズのスローガンに象徴されるように、己の努力による以外、誰も彼らを助けら

れないと考えられた。社会の中で自律できる地位に就くことは、たゆまぬ努力の賜物とされた。チャンスを手にするのに必要なことは、才能、教育、生まれなどに関係なく、ただ正しく第一歩を踏み出すことだというわけである。

「金ぴか時代」のアメリカでは、学者や専門家のみならず大衆をも巻き込む形で、イギリスのハーバート・スペンサーの教えが大いなる人気を集めた。自然のみならず、人間社会も含め、あらゆるものに進化の法則が当てはまるとしたスペンサーのアイデアは、現状維持を欲するビジネスマンにも人気を博し、生存闘争、自然選択という視点から、不成功者のために政府が市場に干渉することには批判が浴びせられた。資本の集中も進化の法則の必然的結果とされ、石油で財をなしたロックフェラーや鉄鋼王と呼ばれたアンドリュー・カーネギーらが率いる巨大企業の誕生に対しても、適者生存や神の法則という観念が用いられた。このように、思想家のみならず実業家も、経済法則を自然法則と受け取る傾向を示したが、これは、自然界と人間社会が同じ法則に支配されるという考えが、当時のアメリカで一般にも広く浸透していたことを示唆している。<sup>10</sup>

進化論は二つのやり方で保守的な考え方を支持するのに利用された。人間の社会生活に応用して言う際の「生存競争」とか「適者生存」といった標語は進化論の中でもっとも有名なものだが、それによると、競争状況のもとでは最強の競争者が勝ちを占め、この過程が改良の継続を可能にするようにこの自然はできていると言う。…この考えは競争の思想に、それが自然法則であるという説得力を与えた。第二に、発展は永遠に継続するものであるという考えは、これまた保守的な政治理論の特異の考え、つまりすべて健全な発展は遅々として急がないものであるという思想に、あらためて説得力を与えることになった。…ハーバート・スペンサーのように、人類の大部分にとってこの

## プラグマティズムと革新主義の時代

当面の苦難がどのようなものであれ、進化は発展であって、生命の全過程ははるかに遠い、それでいて実に輝かしい完成に向っているのだと主張することもできるであろう。…進化論の第一の結論によると、社会のいろいろな過程を改革しようとするすべての試みは、改修しえないものを改修しようとする努力であり、自然の叡智を妨げるものであり、墮落をもたらすに過ぎない、<sup>11</sup> というものであった。

南北戦争前から長年に亙り支持されてきたレッセ・フェールの思想と、同世紀半ばに現れたスペンサーの進化論が結びついた結果、南北戦争後は政府による弱者救済に殊のほか強い批判が向けられがちであった。

こうした状況の中で、レッセ・フェールの隆盛を抑え社会改革に向かおうとする革新主義の動きは、社会を自然法則に委ねるのでなく、人の手により貧困や不平等を解決できるとする、社会改革のための理論的基礎を築くべく、社会ダーウィン主義を基礎にレッセ・フェールを擁護する保守派の決定論に風穴を開ける必要があった。

## 大学における道徳哲学の伝統

こうした19世紀アメリカの大規模な社会の変化は、当然のことながら知的な面にまで及び、それが大学の変革となって表れた。南北戦争後も、アメリカの大学はヨーロッパの伝統を受け継ぐ形で、道徳哲学が支配的な地位を占めていた。

[この時期] アメリカのカレッジやユニバーシティーでは、哲学教育においては道徳哲学が広く行われていた。道徳哲学には、人文学や今では社会科学とされる多くの分野が含まれていた。通常は一人の教授が、しかも多くの場合はカレッジの学長が教えた道徳哲学は、形而

上学、社会科学、宗教が絡み合い、記述的な学であるのみならず規範的な学でもあった。南北戦争前のアメリカで道徳哲学に訴えることの意義は、それにより宗教面での承認が得られ、同時に、神学が果たしてきた学問の統合という役割も果たせる点にあった。だが、大学において道徳哲学が中心的役割を果たす時期は、ほどなく過ぎ去ろうとしていた。<sup>12</sup>

今日では、科学研究が怪しげな目で見られることはなくなっている。だが、伝統的な道徳哲学が支配していた時代には、事情は今とは全く異なっていた。イギリスでは、19世紀初めにベンサム派の功利主義が科学を駆使して社会改革を目指したが、アメリカで革新主義が科学を社会改革に向け活用したのは、このイギリス功利主義の動きに倣ったものである。

もちろん、大学のカリキュラム構成が、道徳哲学から科学に向けてすんなりと移行したわけではない。<sup>13</sup> アメリカで道徳哲学から科学へのウェイトの置き換えが始まったのは、1846年頃からはぼ一世代の期間に互<sup>14</sup>る。それまで、科学的な研究は、素人的な営みとして展開されがちであったが、南北戦争後、研究者は次第に専門科学者へと変貌してゆき、大学においてフルタイムで働く科学者として活動するようになった。これに伴いカリキュラムは一新され、知的雰囲気にも大きな変化がもたらされた。

この変革の先頭に立った人物が、ハーバード大学学長に就任した化学者チャールズ・ウィリアム・エリオットである。ハーバードは、元来、信仰面で保守的な雰囲気を強く匂わせていたところで、教授のルイ・アガシが白眼視されがちであったのも、そのカトリック信仰が理由であつた。<sup>15</sup> エリオットは、ダーウィンの『種の起源』出版から10年後の1869年、弱冠36歳で学長に就任している。彼は、アメリカで進化論の擁護論者を代表する一人であったジョン・フィスクにハーバードでの講演を

依頼するなど、宗教と科学をめぐる思想面での緊張緩和も手がけている。このエリオットが学長になった時期のハーバードにおいて、後にプラグマティズムの哲学講義を行うことになるウィリアム・ジェイムズが、生理学の新知識を武器に学者としてのキャリアをスタートさせている。これは、時代の変化を如実に物語る一例である。こうした動きの中で、目的論に染まった<sup>16</sup>道徳哲学の支配から、学問の中心は、次第に科学へと置き換えられてゆく。だが、この時期に新人が科学研究で大学のポジションを得ることは、決して容易なことではなかった。

1860年から80年の20年間で、[アメリカにおいて]哲学と思想が変化する重要な時代である。ジョンシー・ライト、チャールズ・パーズ、そしてウィリアム・ジェイムズは、哲学者になり、科学に関する彼らの考え方を示し、哲学に対する関係を定着させようと努力する中で、死活的に重要な役割を果たし、アメリカの哲学にその後の新たなパターンを生み出すことになった。彼らは、たとえ高等教育機関において安定した地位を得られなかったときでも、そのキャリアは、思想と実行面で新たな方向づけをし始めていた。これら三人のキャリアに示されたことは、神学に基礎づけられた道徳哲学を、専門家によるアカデミックな哲学に移行させることであった。19世紀末には、アメリカの大学で哲学が神学と袂を分かち始めた。この動きは、すでにそれ以前から起きていたが、1870年代から80年代初めになると、ジョンズ・ホプキンスやハーバードが、ジェイムズやパーズらに哲学のポジション獲得を認めたように、十分オープンなものになった。就任を認める基準として、科学的思考のトレーニング度合いが、宗教的オーソドクシーを凌ぐようになった。だが往々にして、小さいクラブ形式で行われるカレッジでの専門教育のため、それまでの典型的なスタイルから<sup>17</sup>離脱することは容易ではなかった。

元来は画家志望であったジェイムズは、無念の思いを持ちながらそれを断念した後、心の病に陥りながらもそれを克服し、ハーバード大学において生理学、心理学、哲学という順序でキャリアを重ねている。哲学の抽象的議論を嫌い、プラグマティズムという考えに達したのも、ドイツ留学を通じて得た生理学の知識からスタートし、当時の最新知識と思われる脳の科学研究を応用する形で心理学を探究する中で、ジェイムズが到達したヴィジョンであったろう。経験科学の知識を基礎に社会改革を目指した革新主義も、こうした動きの延長線上に位置づけられる。

## Ⅱ. メディカル・ドクターの心理学

### ジェイムズのスペンサー批判

自然界も人間の社会も自然法則の厳然たる支配を受けると主張して譲らなかつたレッセ・フェールと対抗し、そこに何らかの変革の余地を見出すとすれば、まずその姿勢に対し、どこかに風穴を開けることが不可欠となる。若き日にはスペンサー主義に傾倒していたジェイムズは、エリオットが学長に就任した1869年、ハーバード大学でメディカル・ドクターの学位を得ている。彼は、スペンサーが心理学面で残した功績を重んじる一方で、早くからスペンサーの思想に対する批判を展開し、その決定論と目的論の支配を崩す道を探<sup>18</sup>っている。

ジェイムズのスペンサー批判の矛先は、スペンサーが展開した心理学への攻撃に向けられている。進化思想を展開する中で、スペンサーは、人の精神は周囲の状況に対し全く受け身のものと想定していたが、ジェイムズはこの点に着眼した。

私の考えでは…認識者は、どこにも足場を持たず単に漂うだけの鏡

のごとき存在ではない。認識者は一人の役者のようなもので、一方で真理を生む手助け役を演じながら、他方では、自分が生む手助けをした真理の登録機も演じる。心の関心、仮説、公理が人が行動する基礎であり、その行動でかなりの程度まで世界が変わる以上、これらのものは、自らがそう宣言する真理を「作る」役も演じる。換言すれば、心には、それが誕生してからこの方、自発性つまり選択 vote が絡んでいる。心は、このゲームの中にあるのであって、単なる一傍観者であるわけではない。<sup>19</sup>

スペンサーによれば、自然を支配する法則に従い、環境の変化に順応しつつ、単純なものから複雑なものに向け、生き物は進化してきた。この場合、生き物には、自らが環境に主体的に働きかけ、自然法則の支配を変えることはもちろん、それを逃れるような余地もない。あくまで、生き物は法則支配の決定論の中に置かれ、環境の変化に順応しようか否かという二者択一の反応しかなしえないとされる。順応したものは優れたもの、できなかったものは劣ったものとなる。このため、いかなる生き物も、あくまで環境から一方的にテストされる受験者のごとき立場に置かれ、生き物の命運は、それに巧く応じられたか否かだけで決まる。

ジェイムズは、スペンサーのこうした想定に疑問を投げかけた。もし、生き物の側の主体的な働きかけを認める余地があれば、法則支配もそれを基礎とする決定論も揺らぎ始める。生き物は環境に対する単なる受け身の傍観者ではないし、心も、自然をそのまま反映する鏡のごときものではない。あくまで己の側からも自然に何らかの働きかけをし、自然との間に作用・反作用という関係を築きながら、生き物は環境に順応しようとするし、実際そうしてきた。ジェイムズはこうした考えから、自らの医学的知識を基礎に据え、スペンサーの進化思想に対する批判を展開する。

心がどのように応じるべきかを命じる目的論の要素が、[スペンサーの思想の] 到るところに存在することに、科学者は不気味を感じる。…生き残りへの関心 interest of survival が意味するものは…身体的・医学的な視点から見れば、(起きるとすれば) 実際起きる事実として、将来に客観的な反応が起きることだけである。もし、動物の脳が運よく正しい仕方働けば、それは生き残る…。したがって、生き残りへの関与は、いかなる意味でも、知的行動が先行したり、それに条件づけられたりするものではない。生き残ったという事実が、単に付随的な結果として知的行動と結び付けられるだけであるので、それは知性を生む手段というより、機会なのである。<sup>20</sup>

ジェームズは、進化論的な見方を批判しているわけではない。「すべての知識を、一つの組織だったシステムに統合しようというスペンサー氏の仕事は、聖トマスやデカルト以来、何にもまして野心的なものである。<sup>21</sup>」ジェームズが、スペンサーに対する批判のターゲットに据えたものは、その目的論と決定論であった。ジェームズから見ればスペンサーの考えには一種のトリックが施されており、生き残りという付随的あるいは偶発的要素の強いものが、あたかもそうした余地を全く持たない必然と映じる。それが、スペンサーの思想全体を包み込み、壮大な彼の進化思想を決定論的に展開するエネルギーを醸し出している。

だが、冷静に考えれば、生き残りや環境への順応は、最初から巧く行く手順が整っているわけではなく、結果として成功と失敗が分かるだけである。生き残ったという事実は、あくまで試行錯誤の結果に過ぎない。それなのに、結果があらかじめ決まっていたかの如く描くとすれば、そこに到るまでの選択の余地が覆い隠されている。要するに、明日になって初めて分かることを、すでに昨日のうちから分かっていたとする点に、スペンサー流決定論の正体が見えるというのである。

ジェームズは、基本的に、人の心は本質的にアクティブなもので、各

## プラグマティズムと革新主義の時代

人が持つ関心に左右されると考える。これは、スペンサーが人の心を環境の影響を一方的に受けるだけのものとしたこととは対極に位置する。もちろん、人間にも動物の延長線上に位置づけられる条件反射機能はあるが、人の心は眼前にあるものに応じるだけのものではなく、理想、美、ウィット、モラル、論理など、広範なものと広範な関わりを持っているという。

ジェイムズのスペンサー批判は、その心理学批判に留まらず、スペンサーの一元論、決定論に対する批判でもある。ジェイムズは、多元的にして休まることのない宇宙 a pluralistic, restless universe という観点から、社会ダーウィン主義の決定論的世界観を批判した。<sup>22</sup>「プラグマティズム」という観念は、ジェイムズの心の中には以前から潜在的にあったが、それが哲学上の動きとして表面化したのは、1898年8月にジェイムズがカリフォルニア大学で講演をしてからである。それが哲学上の動きとして本格化するのには、1907年に彼の名著『プラグマティズム』が公にされてからであった。<sup>23</sup>

プラグマティズムは、レッセ・フェール思想に対抗して革新主義を支える哲学面での基礎を提供したが、豊かで個人主義を基調とする家に生まれたジェイムズには自由をもたらしたのに対し、彼より20歳ほど若いジョン・デューイには道具主義と社会改革の視点をもたらした。<sup>24</sup>

ジェイムズは、社会ダーウィン主義の決定論は批判したが、スペンサーが称える古来からのイギリスの個人主義精神には同調していた。ジェイムズは、政治学のエドウィン・ゴドキンや共和党のマグワンプ派の熱愛者であったが、社会改革には比較的関心が薄かったためか、革新主義を支える一般福祉国家の建設に向けた提言などは、さほど行っていない。<sup>25</sup>

ジェイムズがハーバードで行ったプラグマティズムの講義は、ややもすればその軽妙な語り口に惑わされ、軽い哲学談義のごとく思われかねないが、その背後には、長年の生理学と心理学の研究を通じて得た確たる医学知識が控えている。

## 反射，準反射，有意的動作

ジェイムズは、ドイツ留学中にはひどい心の病に苛まれ、ウィルヘルム・ヴントの講義にもろくに出席できなかったという。その間、孤独な読書を通じて精神の闇を脱し、生理学に関する多くの知識をアメリカに持ち帰った。彼の『心理学』を覗いてみれば、生理学者としてのジェイムズの顔がそこにくっきりと浮かび上がる。

もし私がいま一本の樹の根元の所を切り始めても、その枝はそれによって動かされることはなく、その葉もこれまで通り平和にさらさらと風にそよいでいる。これに反して、もし私が他人の足を傷つけるならば、彼は直ちに全身でこの攻撃に対して驚愕あるいは防御の運動をもって反応する。この違いはなぜかと言うと、人には神経系統があるが樹にはそれがないからである。そして神経系統の機能は、身体各部分の調和的協同動作を行なわせることにある。

求心性神経…が何らかの物理的刺激物によって興奮させられた時には…すべて神経中枢に興奮を伝達する。中枢に起こった興奮はそこに止まらず、動物によって、また刺激物の種類によって異なるが、遠心性神経を通して運動を引き起こす。これらの反応動作は…有害刺激を排除し、有益な刺激を持続させる。…

ありふれた例をあげると、私が停車場に入ったときに車掌が、「発車します。皆さんご乗車下さい！」と叫ぶのを聞くと、まず心臓が止まり、次に動悸が強くなる、そして脚は歩を速めて私の鼓膜に落ちる空気の波動（車掌の声）に反応する。[列車に向かい] 走っているときにつまずくと、倒れそうな感覚が、倒れる方向へ手を出す運動を引き起こす。その効果は、倒れたときの急激なショックから身を守ることである。もし煤が目に入ると、瞼は強く閉じて涙が多量に流れ、これを洗い去ろうとする。<sup>26</sup>

ジェイムズの心理学講義は、ユーモアを交えながら、当時の新たな医学知識を基礎に展開したものであろう。旧来の道徳哲学講義であれば、このような論調は到底期待できなかった。その語り口は専門家だけを意識したものではなく、聴衆を厭きさせない工夫が随所に見られる。その背後にも、人の緊張感はそう長続きしないという生理学の知識があったかもしれない。ここでジェイムズは、人の行動の多くが脳からの指令によることを悟らせようとしている。

だが、人の行動がすべて脳からの指令によるわけではない。中には、熱いやかんに触れた場合の反射行為のように、脳の指令によらないものもある。これらを含め、行動は便宜的に反射、準反射、優位的動作の三種類に分類される。

眼を閉じることと涙を流すことはまったく無意的である。心臓の動悸も同様である。このような無意的反応を「反射」運動と言う。転倒のショックを和らげるための腕の運動も意識的に意図されたものとしては速すぎるので、これも反射と言うことができる。しかし少なくとも前のものほど自動的ではない。というのは人は意識的努力によってこれをより巧く行なうことを学習したり、これを完全に抑えることさえできるからである。本能と意志が等分に含まれているこの種の動作は「準反射」と呼ばれてきた。これに反して列車の方に走って行く運動には、何ら本能的要素はない。まったく教育の結果であり、達すべき目的の意識、および明らかな意志の命令に先行されている。それは「有意的動作」である。<sup>27</sup>

生理学的に、人の行動はこの三種類の行動に区別される。「反射」では、生体が皮膚刺激を与えられると、脳に因らずとも驚くほどの確に、まるで操り人形のごとく、無意識的・防衛的に反応する。そこから、意思の作用がやや高まると、「準反射」的動作として分類され、さらに意

思の占める比率が高まれば「有意的動作」となる。つまり、無意識のうちに起きる動作から、自分の努力で習得し、習熟しうる動作に向け、行動は三種類に分けられる。

もちろん、こうした行動の区分は、その間に確実な一線が引けるといえるものではなく、人の行為も法則に支配されていることを大前提とした、自然科学としての生理学、心理学にとって、生き物の動作を説明するための便宜的な区分であるに過ぎない。

これらの行動区分で、行為が有意的なものになるほど、自由意志の作用する余地は大きくなり、その分、自然法則の支配が低下することになる。ジェイムズは、これを、新たな刺激が与えられると、脳は容易に自らのうちに消すことの難しい新たな回路を作る器官であるという、脳の神経組織の持つ可塑性との関係で見ている。

## 物の「本当の形」

四角い机の表面を眺め、われわれはそれにいわば「本当の形」があり、それがたまたま目に映った一つのヴァリエーションとして眼前に表れているだけだと考える。無数のヴァリエーションのうちのたった一つでしかないにも拘わらず、方形を机の「本当の形」と信じて疑わず、どの形にも同じ資格があるとは思わない。こうした特権を付与するのは常識であるが、その背後には、われわれがセンスデータを受け取る際に、受ける側が暗黙のうちにそれを序列化している仕組みがあるという。

外的世界は無数の混沌とした運動から成っていると物理学は教えるが、その中から各感覚器官はある範囲内の速度のものだけを取り上げる。そしてそれには反応するが、それ以外のものはあたかも存在していないかのように完全に見逃してしまう…ことによって、対比、明瞭な強弱、急激な変化、鮮やかな明暗に満ちた世界をつくり出すのであ

る。…われわれが目にする感覚は、実際的あるいは美的にわれわれに興味を起こさせる事物のサインとなるものであり、したがってそれに対してわれわれは実体的な名称を与え、このような独立と威厳をそなえた独特の高い地位を与えているのである。…

心はいくつかの感覚の中から、その事物を最も真実に表すものを選択し、その他のものをその時々<sup>28</sup>の状態によって変化する見かけの姿と考える。したがってテーブルの天板は方形と言われるが、それは網膜上に生ずる無数の感覚の中のただ一つに過ぎない…。しかし…四隅が直角のものをテーブルの真実の形であると言って、美的理由から方形という属性をテーブルの本質として<sup>28</sup>している。

この例は、ものを眺める場合でさえ、それを何の選択行為もない全く受動的なものとは言えないことを示唆<sup>29</sup>している。実際、われわれは可視光線と呼ばれる一定の範囲内の波長のものしか眼で捉えられないし、聴覚で捉える音についても同様な限界がある。それにも拘らず、見えるもの、聞こえるものだけを世界のすべてと安直に思い込む。ジェイズが「外的世界は無数の混沌とした運動から成っている」カオスであるというのは、こうした限界は、外界が持つものではなく、人が世界に押し付けた結果と考えるからである。

またジェイズは構成心理学を批判し、センスデータの受容を、その最も基本となる最小単位にまで分解し、そこから今度はそれらを組合わせて経験を説明するやり方も、人為的抽象によるものとして拒否する。例えばレモネードの味を、砂糖とレモンの合成されたものとは考えず、あくまでそれはレモネードの味だ<sup>30</sup>という。こうした例を通し、ジェイズは決定論の主張を覆そうと試みる。動作が意識的な道徳的判断の段階になれば、選択の余地はさらに拡大する。

倫理の水準に達すると、そこでは選択が断然君臨している。ある動

作は、それが多くのこれと同様に可能なものの中から選択されたものでなければ、まったく倫理的性質をもたない。正道のための議論を支持し常にこれを守ること、より華やかな道への憧れを抑えること、困難な道を躊躇せずに歩み続けることなどは、すべて特徴的な倫理的エネルギーである。

しかしこれだけではない。…この罪を犯そうか、あの職業を選ぼうか、あの役を引き受けようか、この資産家と結婚しようかなどと迷っているとき、この人は実際将来どれにでもなり得るいくつかの身分の間での選択点に立っているのである。将来彼が何になるかは、この瞬間の彼の行為によって決まるのである。…決定論を力説したショーペンハウエルは、このような倫理的にみて決定的瞬間において意識的に問題になっているよう思えるものは、その人自身の心構えであることを忘れていた。その人についての問題は…どのような人間になることを彼がいま選択するかということである。<sup>31</sup>

決定論に立ち、いかなる行為にも選択の余地はないと仮定すれば、自由と責任の理論的基礎が築けない。そこでは、人が努力を積み重ね、幸福な人生を切り開くことに成功しようが、悪い誘惑に抗し切れず破滅の人生を歩もうが、すべて当人とは無関係のところ物事が決定される。これでは、克己研鑽を唱え、立身出世の重要性を力説しようとも、己の責任で努力することを生かす余地がない。

ジェイムズは、スペンサーが旧来の道徳哲学の権威を科学により葬った面での功績は高く評価しながら、その決定論の強さに反発する。ジェイムズが、自然科学としての心理学を、断固として法則支配の決定論の世界を前提として行うと言うのも、自由意志の問題を心理学には答えられない、哲学に委ねられた最大の問題と位置づけるからである。

## 本質論は目的論

ジェイムズは、外界からの刺激の受容が、全く受動的に行われているように見えながら、決してそうではないことを、数々の実例を挙げながら示した。だがこれは、刺激の受容段階だけに留まらない。そこから歩を進め、ものを思索する段階に到っても、同じように、そこに無意識のうちに何かカラクリがあると考える。

例えば、事物には純粹にかつ絶対的・独占的に「本質」があると想定することが、その一例である。暗黙のうちに展開されてきたこの本質論、つまり「ある物事の本質がその物をその物たらしめる」という議論は、何を本質とするかが恣意に左右されるため、その時々で本質を「偶有性」と区別する形で、目的論への奉仕に終始してきたと言う。

例えば、物事に付された名はその本質を表すかのように思われがちだが、ジェイムズは、それを神聖にして侵すべからざる特権的なものとは考えない。物に名称があるのは、われわれが必要に駆られたため、必要な物は、今なお名もなきまま放置され、認識されない場合さえある。したがって、物の名称は、物の性質や本質を表すわけではなく、「われわれの性質を示すもの」である。それにも拘らず、人は偏見に満ち、物事に付された名とそれが指示するものとの間に、何か永続する特別な関係があるかのごとく思い込み、それに独占的・特権的な地位を与えてしまう。ジェイムズは、ジョン・ロックはこの誤った考えを覆したものの、彼の後継者は誰もこの誤りを免れなかったという。

重要な特質は人により、また時により絶えず変化する。したがって同一事物に対してさまざまな呼称や概念がある。しかし多くの日常使用する物——紙、インキ、バター、オーバーコートのようなもの——はきわめて恒常不変的な重要性をもち、また非常に固定した名称をもっているのだから、ついにわれわれは〔名とそれが指示するものとの間

には特別な関係があると] 理解することが唯一の真実な理解の仕方であると信ずるようになる。しかしこのような理解の仕方が他に比べて真実に近い理解の仕方ではない。それらはただ、われわれに役に立つことが多いというに過ぎない。…

本質の唯一の意味は目的論的であり、分類と概念は、純粋に目的的な心の武器である…。ある事物の本質とは、その物の諸特質中の一つであって…私の興味にとって重要なものことである。私はそれを、この重要な特質をもつ他の事物の中に分類し、この特質に従って命名し、この特質を備えるものとしてそれを理解する。そしてこのように分類、命名、理解する間は、これに関する他のすべての真理は、私に<sup>32</sup>としては無いも同然のものである。

ものには「本当の形」があると考えただけでなく、物の名はその本質を表すとみなすこと、言い換えれば、名とそれが指示する物との間には「本質」を介在した特別な関係があると考えたことを、ジェイムズは一種の思考上のトリックとみなす。

例えば化学者は、事物の分子構造を、その事物の絶対的な意味で本質とみなし、水がH-O-Hであることは、それが砂糖を溶かすもの、あるいは喉の渇きを癒してくれるものという以上に、そこにさらに深い真実があると考えた傾向があるという。だがジェイムズは、「水は同じ真実性をもってこれらのすべてである」と断じる。化学者の序列が、特権的な地位を占めるわけではない。それは、化学者が実験室で分析をする場合、その目的のために留意すべき重要な側面を示しているというに留まる。だが、この化学者が炎天下を歩き回り、喉の渇きを癒したいと思えば、水がH-O-Hであることにさしたる重要性はなくなり、それより喉を潤す水の方が圧倒的に重要なものとなる。このように、何がその「本質」かは、その時々により変化し、同一人物にとってさえ同一のままとは限らない。

人は素直にありのままの世界を受け取っているわけではないし、ありのままに世界を分類し、思考しているわけでもない。カオスである外界から、感覚器官が刺激を受容する段階で暗黙の選別をし、コスモスを形成するのと同じように、自ら作り上げた本質論という暗黙のカラクリを、思考においても自然の前提とみなす誤りを人は犯している、とジェイムズは考える。

外界を認識する段階で、われわれは否応なしに世界を序列化し、それによりコスモスを形成する。それは意識に上ることもあれば、無意識のうちに行われることもある。われわれは、必要に応じて外界を序列化しておきながら、それを逆に世界の秩序だと思い込んでいる。ジェイムズはそれを「分類と概念は、純粋に目的的な心の武器である」と表現した。

刺激の受容から思考に到るまで、ジェイムズは、生理学的知識の裏づけを武器に、暗黙のうちに潜むカラクリをあぶり出そうとする。

## 習慣：自由のパラドックス

悪い習慣を改めるには大変な努力を要する一方で、良い習慣はなかなか身に着かない。また、自由であることは好ましいこととはいえ、持てあますほど自由であることは、誰にとっても必ずしも居心地のいいものではない。ここには、自由に関するパラドックスがある。ジェイムズによれば、これには立派な生理学的根拠がある。自由を重んじるジェイムズの習慣論では、個人の自己決定の問題にも、社会における秩序の形成や治安の維持にも通じる、生理学的基礎が示されている。

獲得された習慣は、生理学的見地から見れば脳内に形成された神経発射の新通路に他ならず、それによってそれ以後入ってくる刺激が流れ出ようとするのである。…観念の連合、知覚、記憶、推理、意志の教育なども、正にそのような発射通路が新たに形成された結果として

理解するのが最もよい。…

自然の法則とは、物質のさまざまな要素が相互に作用、反作用する際に従う不変の習慣に他ならない。しかしながら有機体の世界では習慣はこれよりも変動的である。本能でさえも同一種族内の個体によって異なり、また同一個体内でも…その時の必要に応じて変化する。原子論の原理によれば、物質の要素的粒子の習慣は変化し得ない。なぜなら、粒子それ自体が変化し得ないからである。しかし物質の複合構成されたものの習慣は変化し得る。なぜなら、その習慣は結局は複合構成されたものの構造によって定まるのであって、外部からの力と内部の緊張は時々刻々これに作用して、その構造を以前とは違ったものに変えるからである。すなわち、その物体が可塑性に富んでいてその統一性を保つことができ、その構造を曲げても折れてしまわないならば、習慣は変化し得るのである。<sup>33</sup>

人体の仕組みも物理学的に眺めるメディカル・ドクターの観点から、ジェームズは、物質界における作用と反作用の法則を習慣と見る。物質界では、自然を構成する単位である粒子そのものが変化し得ないため、自然法則の不変性が文字通りの形で表れる。だが、有機体つまり生き物が習慣を獲得する仕方は、刺激に対し脳内に新通路を形成するという特徴を持つため、物質界の場合と比較すれば、脳の神経組織が可塑的であるだけ、より変動的になる。

例えば、一旦折り曲げた紙は、それ以後、折り曲げた箇所で容易に折れ曲がるようになる。こうした性質は、大脳に新通路ができる状況と似ており、ある行動を意図的に繰り返すことで、脳に「折れ目」を刻むことも可能である。だが、それだけなら、一旦できた「折れ目」を変えることはできず、己の努力で習慣を変えることもできなくなる。だが、生き物の習慣は、必ずしも自然法則により完全に支配されるものではなく、本人の努力によりそれを左右できる面を持つという。

もちろん、いかなる変化でも可能と言えないのは、脳の可塑性にも限度があるからである。ジェイムズはこれを、脳が「外界の影響に屈するほどの弱さと、即座に屈してしまわないほどの強さ」を持つと言い、とりわけ脳の神経組織にこの特徴が顕著であるという。このように、「生物における習慣の現象は、その身体を構成する有機物質の可塑性によって生ずるもの」であり、これは、衣服が真新しい場合より、しばらく着た後の方が体になじむことに似ている。

大脳半球の皮質が特別に感じやすいのは、感覚神経を通して入ってくる非常に弱い刺激流に対してである。一度入った刺激流は出口を見いださなければならない。出て行くときに刺激流はその通った路に痕跡を残す。要するに刺激流のなし得ることは、古い通路を深くするか、新しい通路を作ることしかない。したがって脳の可塑性は次の言葉をもって言い尽くされる。すなわち脳は、容易に消失しない通路を、感覚器官から入ってくる刺激流によって、きわめて簡単にその中に作ってしまう器官である。…

構造上の変化の発達が、無生物におけるよりも生物において速い[のは]…生物は不断の栄養的新陳代謝が行なわれる場所であるから、過去の印象によってできた元の組織の構造を再現することによって変化に抵抗するよりは、その不断の栄養的新陳代謝によって外界からの印象により生じた変化を強め、固定しようとする傾向があるからである。したがってわれわれが筋肉や脳を新しい方法で働かすことを練習したとき、その時には到底できなくても、一日二日休んだ後に訓練を再開すると、その技術が驚くほど上達していることがよくある。<sup>35</sup>

ここで展開されているものは、「本質論」といった曖昧な議論ではなく、習慣獲得に関する生理学的解明である。脳は可塑性が高いため、新たな刺激を受けると神経組織に容易にその痕跡を作り、それは容易なこ

とでは消失しない。同じ刺激が繰り返し加えられれば、その度に脳の痕跡はますます深くなる。脳がこのような特徴を持つなら、われわれにとっては、これと敢えて対峙するのではなく、逆にそれを味方に着けることが肝要である。しかしこれは、一旦悪い習慣を身につければ、時が経つほどそれを改めることが容易でなくなる理由も示している。これは諸刃の剣であるが、脳の可塑性のなせる業に他ならない。ジェイムズは、脳のこの特徴を基礎に、人が努力することを通じ良い習慣を身につけることの重要性を説く。これが、自らの努力を通じて自分自身を変え、ひいては、個人のみならず社会をも変える重要な要素になる。

その一方で、習慣を身につけない全くの自由は、逆にエネルギーの無駄な消費につながるという。したがって、自由が好ましいとはいえ、自らの努力を通じ良い習慣を身につけ、それによりこのエネルギーの無駄な消費を抑えることが、高度な思考のために十分な余地を残せるという意味でも大事であるとジェイムズは説く。

つまり、習慣は己の努力により形成すべきものであって、それは可能でもある。習慣が身につくことは、有為の動作を減らすことになるが、これは自由であることと矛盾しない。それどころか、つまらぬことにエネルギーを浪費することを抑え、結果的に自由であることを高められるという。したがって、己の努力による良い習慣の獲得が、その人物にいっそう良質の自由を与えることになる。

第一に、習慣はわれわれの運動を単純化し、これを正確にし、かつ疲労を減少させる。人は生来、その神経中枢中にて予め備わった装置によってできること以上のことをしようとする傾向をもっている。他の動物の動作の多くは自動的である。しかし人間においては動作の数は膨大であって、その多くは苦痛を伴う努力の成果とならざるを得ない。もし練習の効果がなく、習慣が神経と筋肉のエネルギー消費を節約しなかったならば、人間は気の毒な状態に陥るであろう。…第二に、

習慣はわれわれの動作を遂行するのに必要な意識的注意を減じる。<sup>36</sup>

思考経済という言葉にも似て、動作経済とでもいうべきものが、習慣の形成によって可能になる。それにより、神経と筋肉のエネルギー消費が節約され、余計な苦痛を味わわずに済む。それだけでなく、余計な神経をすり減らすことも逃れる。ジェイムズは、習慣を第二の天性とし、悪い習慣が身に着くことを、伝染病に罹患するのと同じように恐れる必要があると説く。<sup>37</sup>

脳の神経組織に備わったこうした機能は、外界の刺激に反応し、リスクを排し自らの安全を確保しようとする、生物進化の産物とみなされる。進化論の普及以前においては、こうした視点がなく、生き物の行動を大脳神経組織の医学的・生理学的な構造変化との関連で捉えてこなかった。内的関係に当たる靈魂・精神・心は、外界からの刺激との関連で考察されず、神々しい内面を外界とは切り離し、別個の検討対象としてきた。

もちろん、こうした刺激に反応するだけの、操り人形のごとき人間の見方は、人間に対する冒瀆として批判されもする。だが、19世紀の医学、生理学研究により、この新たな視点からもたらされた知識は、一つの仮説として、人間を含めた生物像を想定するのに大きな足がかりを提供した。一見するとそのように思われかねない主張を展開しつつも、ジェイムズは、決して唯物論の賞賛者ではなかった。

## 習慣は社会のほずみ車

習慣に関するジェイムズの考えは、単に個人向けの訓話として捉えられてはならず、法の遵守とも絡む、社会の中における人間行動と直結している。

習慣は社会の偉大なはずみ車であり、最も貴重な旧守力を社会の中で果している。習慣によってのみ、われわれは制度の拘束の中に留まることができ、裕福な家に育った者を貧者の羨望と蜂起から守ることができる。習慣によってのみ、最も困難で厭わしい人生の行路も、この路を歩まされてきた人によって見捨てられることはない。習慣こそ漁師や水夫を寒中でも海にとどまらせ、鉞夫を暗闇の中に居らせ、田舎の人を何ヶ月も雪の中の丸太小屋とさびしい田園に固着させ、砂漠や寒冷地の原住民がわれわれの所へ侵入してくることを防いでいる。習慣こそ、われわれすべてをその教養と、初めの選択の線に沿って最後まで人生の奮闘をするように運命づけ、自分に合わない仕事であっても、その他に適当なものがなく、新しく始めるには遅すぎるために、これに最善を尽くさせるものである。習慣が社会の各階級の混合を防いでいる。25歳ともなれば、若い商人、若い医師、若い牧師、若い弁護士として職業的色彩が定まり、その性格、思想の傾向、先入観、「仕事」ぶりに隔たりができて、あたかも上着の袖についた折り目を急に変えることができないように、次第にこの傾向から逃れられないようになる。概して逃れないのが最もよい。われわれ多くの者においては、30歳までに性格が漆喰のように固定して、再び軟らかくならない方が世間のためによい。<sup>38</sup>

これを以って、ジェイムズの非情さ、社会に対する関心の薄さを批判する向きもあるが、<sup>39</sup>これは彼の気紛れな考えによるものではなく、その基礎は、依然として生理学的知識に支えられている。

人が同じ習慣を長年に互り繰り返せば、その性格や振舞いの習慣が変えようがないほどに固定化するのは、大脳の神経組織の可塑性と絡む特徴があるからである。ジェイムズは、脳の可塑性をさほど大きなものとは考えていない。人の心がタブラ・ラサではないのと同じように、個人の境遇がどうであれ、獲得した習慣の痕跡を後になって消すにも、当然、

限度がある。

決定論の世界では、すべてが予め決まっており、事後にそれを変える余地はない。逆に、個人の資質や努力をよそに、悪いことはすべて社会という環境のなせる業とみなせば、社会上の難点さえ除去されれば、個人にはいかなる変化も可能だということになる。これは、いわば決定論を裏返しただけのものであるため、いずれの立場に立っても、個人の努力が評価される余地は、予め奪われてしまっている。

このため、意識的な選択を通じ自己を高めてゆく努力が、誰にとっても重要であるという見方を重視するジェイムズは、これらのいずれの陣営にも与さず、大脳神経組織の生理学的研究から、決定論が言うほど脳に可塑性がないとは言えず、また、逆の立場で考えるほど、脳に可塑性があるとも考えなかった。したがって、いかにも冷淡極まりなく見える彼の主張も、脳の神経組織がほぼ固定化され、以後の改善を望める時期を過ぎれば、それに劇的な変化を期待しなかっただけの話である。

近代社会の到来により封建的身分の支配は崩れたとはいえ、スペンサーのように、環境への一方的な順応ですべてが決するというのであれば、依然として運命論の支配から脱することはできない。ジェイムズが、生理学的知識を基礎に、人間の習慣がその個人の脳の特性によって形成されるものであるとしたことにより、予め決まった不変法則により、すべてが決定されてしまう運命論の支配を排し、とりわけ人間の行うべき行動に対し、個人の持つべき自らの責任という観念を理論的に位置づけることが、理論的に可能になる。

ジェイムズの主要な関心は…スペンサー流社会進化の圧倒的因果網から自発性と不確定性を救出することであったと思われる。自発性がなかったら、また個人が何らかの方法で歴史の流れを変えうる可能性というものがなかったら、いかなる種類の改善の機会もなく、勝利か<sup>40</sup>敗北かのいずれかがつきまとう闘争のロマンスもすべてなくなる。

各人を取り巻く状況のよし悪しがあることは避け難いとしても、人が成功に向けて努力することを実質的に意味あるものにするためには、予め環境への適応不適応によりすべてが決まるという決定論的な視点から、己の意思によって自らを改善し、それを通じ社会の中で自らの人生を切り開いて行けるだけの余地を、理論的に残しておかねばならない。

ジェイムズは、習慣の獲得を基礎に、その教育上の重要性を次のように述べている。

すべての教育において大切なことは、われわれの神経系統を敵にまわすのではなく、味方につけることである。それはわれわれの所得を基本金とし、資本として、その利息によって楽に暮らすことである。したがって、われわれはできるだけ早い時期に、できるだけ多くの有用な動作を自動的、習慣的なものとし、われわれに不利と見える習慣に陥ることに対しては、あたかも伝染病に対するかのように警戒しなければならない。われわれの日常生活の些細なことを努力の要らない自動動作に任せることができるほど、高等な心の力をそれ自身に適した仕事のために自由にしておくことができるのである。何事も習慣化されておらず、絶えず不決断に悩まされる人ほど惨めなものはない。そのような人にとっては、一本の葉巻に火を点けることも、一杯のお茶を飲むことも、毎日起きたり寝たりする時間も、ちょっとした仕事を始めることも、すべてにはっきりとした意志的配慮が必要である。このような人は、まったく意識を用いなくてもよい位に自分の中にしみ込んでいるはずの事柄について、いちいち決心したり晦やんだりすることにその大半の時間をとってしまう。読者の中にこのような日常の義務がしみ込んでいない人がいるならば、いますぐにこれを正された方がよい。…要するにあなたの決心を、知り得る限りの補助手段で囲んでしまうことである。このようにするとあなたの新しい出発に弾みがつき、これがなければあるいは負けてしまうかも知れない誘惑に

負けないようになり、負けることが一日先に延びるたびに、それだけ  
まったく起こらなくなる機会が加わるのである。<sup>41</sup>

ジェイムズの習慣論から見ると、彼の考えと革新主義のそれとの間には、かなりの溝があることも分かる。革新主義の動きは、レッセ・フェールを支持する最高裁の決定論的姿勢を批判する中で本格化したとも言われ、<sup>42</sup> 社会改革を求める勢力の支持の高まりを受け、議会による改革立法を通じて社会を変えようと試みた。1905年にロックナー事件で違憲の判断を受けたニューヨーク州労働法をはじめ、各種の社会改革立法の制定の背後には、革新主義の動きが絡んでいる。

だが、この革新主義の動きと、習慣を社会の偉大なはずみ車とするジェイムズの考えとは、必ずしも巧くマッチしない。ジェイムズは脳組織の可塑性を唱え、決定論の支配に風穴を開けようと試みるが、その可塑性に過大な期待を寄せたわけではない。これはジェイムズの保守性のゆえというより、脳が生理学的特徴として持つ保守性のゆえである。

ジェイムズは、法に関してさほど多くを語っていないが、法に関する彼の考えは、言葉や真理と同じように、いつとはなしに成長してくると述べた次の個所に、かなり明確に示されている。

法律そのもの…ラテン語そのものという言葉…が判決とか単語や措辞法とかに先だって存在していて、これらのものを厳密に規定しそれに従うことを要求するような本体を意味するものであることを聴者に考えさせようとする。しかしほんの少しでも反省をはたらかせてみると、法律もラテン語もそのような種類の原理などではなく、むしろ結果なのだということがわかるのである。行為が適法であるか違法であるかの区別も、話し方が正確であるか不正確であるかの区別も、人々が具体的な個々の経験を取り交している間にいつとはなしに出来上ったものであって、信念における真と偽との区別にしても全く同じよう

にして成長してくるのである。真理は以前の真理に接木され、それを修正してゆく。それは慣用句が以前の慣用句に接木され、法律が以前の法律に接木されるのと全く同じである。以前の法律と新しい事件が与えられると、裁判官は両者を撚り合わせて新しい法律を作り上げる。<sup>43</sup>

通常、法学においては、予め原理のごときものとして法の本体が先にあり、それが個々の事件に適用されるだけだと説明される。だが、ジェイムズはこの考えを採らない。脳には既存の神経組織があるだけで、そこに新たな経験が加わると、既存の組織の経路がさらに深く掘られるか、あるいは新たな経路が作られる形で組織が変化する。この生理学的アイデアが、法についてもモデルとしてジェイムズの考えの基礎に横たわっている。したがって、既存の法が新たな紛争に直面すれば、裁判官が両者を見据えて新たな判断を下し、それが法として既存のものになってゆくという。

イギリスの歴史法学者ヘンリー・メインは、コモン・ロー裁判所の裁判官は、表に向けては法は決して変化しないと言い張りながら、新たな事情を盛り込んで判決を下し、かなり後になって既存の法が変化したことを人々に気づかせるやり方で、新たな事態に対処してきたと述べている。<sup>44</sup>ジェイムズの友人であったO・W・ホームズは、イギリスにメインを訪ねているが、メインとジェイムズの間には、直接の接触はない。だが、ここでジェイムズが述べている法に関する説明は、メインが言うコモン・ローの発展に関する説明と軌を一にしている。

法が既存の法に接ぎ木するような形で成長するというジェイムズのこの説明は、社会を有機体として見た場合の、脳の生理学的特徴に当たる。ジェイムズは、法があれば人はそれを遵守するものだという法実証主義的な考えには与しない。あくまで人が法を遵守する意識は習慣によることが重要だと考えており、この点で、ジェイムズはエールリッヒが唱え

た「生ける法」の観念に近い視点を示したものと言えよう。

こうした点で、ジェイムズと革新主義との間には、考え方の上でいささか距離がある。改革立法を通じた社会変革という考えは、往々にして急進主義的になりがちであるし、ジェイムズの習慣に関する考えは、社会改革を重視する革新主義にとっては、やや不都合な面がある。したがって、革新主義が理性にかなり大きなウェイトを置き、生理学的に見れば社会の可塑性に過大とも言える期待を寄せた面があるとすれば、それはジェイムズの考えとは必ずしもマッチしないであろう。それは、ジェイムズが人が己の考えを変える際の頑固さを述べている点からも、察せられる。

人はそれぞれ既にさまざまな古い意見のストックをもち合わせている。ところがこれらの古い意見を動揺させるような新しい経験に出会う。…[すると]彼の心がそれまで経験したことのない内的な苦悶が生ずる、そしてこの苦悶をのがれるためにこれまで抱いていた一群の意見を修正しようとする。しかしこの修正はできるだけしないですませようとする、なぜかというに、この信念の問題どなると、われわれはすべて極端な保守主義者であるからである。そこで彼はまずこの意見を変え、それから次にあの意見をという風に進んで行く…がそのうちいつか古い意見のストックに加えてもそれをかき乱すことが一番少いような或る新しい観念、すなわち古い意見のストックと新しい経験とをとりもって、両者を互いにこの上なくしっくりとつきませ、少しも不都合を感じさせないような観念が浮び出てくる。するとこの新しい観念が真なるものとして採用される。この観念は古い真理に最小限の修正を施しただけで、つまり辛うじて新しさが認められるところまで拡張しはするが、この新しさをもできるだけ在来の慣れ親しんでいる方法で考えるという風にして、旧のまま保存している。われわれの抱いている先入見をことごとく破壊するような極端な説明を与えるこ

とは、新しさというものを真に説明するものとは決して認められないであろう。

革新主義が過去との連続性を一挙に断ち切る考えに同調したわけではないが、可塑性のレンジに関し、革新主義ジェームズとの間にはかなりの違いが読み取れる。己の考えを改める際のこうした頑固な姿勢も、生理学的根拠に基づく大脳神経組織に備わった特徴であるとすれば、法による社会変革の可能性についても、ジェームズは多くの革新主義者ほど樂觀的にはなれなかったであろう。

### Ⅲ. 『プラグマティズム』の科学的基礎

#### 模写説批判：真理は有用な道具

ジェームズの名を有名にしたものが、生理学から心理学を経て、ハーバードで最後に哲学教授として講義した『プラグマティズム』である。その軽妙な語り口は、彼独自の言い回しであるとしても、その背後には生理学、心理学の知識が横たわっており、「意識の流れ」といった言い回しにも、単なる比喩の域を超え、脳内の微電流の流れを想い描いていた様子さえ窺える。

ジェームズは、真理というものを、観念と実在との一致に求める伝統的な模写説を批判し、プラグマティズム独自の真理論を展開する。ジェームズが、真理は観念と実在との一致であると言っても、旧来の哲学では、真理が不動の絶対的なものと考えられてきたのに対し、プラグマティズムの真理観では、それを刻々と変化する可能性を含んだものとする点で、両者の言う「一致」の間には、大きな違いがある。

真理とはわれわれの或る観念の性質である。虚偽が観念と実在との不一致を意味するように、真理は観念と「実在」との「一致」を意味している。プラグマティストと主知主義者とはどちらもこの定義を自明のこととして承認する。ただ、「一致」という名辞が正確には何を意味するか、そして実在がそれにわれわれの観念の一致すべきものといわれるとき、この「実在」という名辞は何を意味するのか、ということについて問題が提起されると、両者の論争がはじまるのである。

…

一般には、真の観念はその実在を模写しなければならぬ、と考えられている。他の一般の見解と同じく、この考えももっともふつうな経験の類推に従っている。感覚的な事物についてのわれわれの真の観念はまさしくその事物を模写している。<sup>45</sup>…

真理を実在との一致、実在のコピーとみなす考えは、一般に「模写説」として知られる。ジェイムズは、いったいなぜ真理は実在の模写と考えられ続けてきたのかに目を向けながら、観念論者はあくまで模写説を固守し、観念は絶対者の永遠のアイデアの模写に接づくほど真理の度を増すと考えてきたという。

主知主義者の大きい仮定となっているのは、真理は本質的に不活動な静的な関係を意味する、ということである。そこでもし諸君が何ものかについて真の観念をえてしまったとすると、それでもうおしまいなのである。諸君は真理を所有している。諸君は認識している。諸君は諸君の思惟するという運命を成就してしまったのである。<sup>46</sup>

ジェイムズによれば、これまで真理の観念は、無条件的にスタティックなもので、永遠にして不動のものと想定されてきた。だが、これは日々の経験において、われわれが日常的に真理としている観念とはうまく折

り合わない。日ごろの経験を省みれば、大文字の T で始まる不動の真理は取り敢えず除外し、それをもっと日常的なレベルにまで引き下げてみれば、真理といえども、役立たなくなれば無常にも次々と打ち捨ててきたことが分かる。永遠に不動であるどころか、下手をすれば明日にも捨てられる運命にある真理は、潜在的に見れば非常に数多くに上る。実際に、人々はそのように振舞っておきながら、真理とは何かという難しい話になると、永遠に不動の神々しき一者へと一挙に飛躍するが、これが悪癖であるという。

こうした反省に立てば、真理は一つでも不動でもなく、実に数多くあって、しかもそれが日常的に役に立ったことを根拠として、われわれがそれを暫定的に「真理」と称してきた姿が浮かび上がってくる。まさに真理も、名と物事の関係と同じように、物事の性質というより、「われわれの性質を示すもの」である。ジェイムズが真理の効力化・有効化と称するのは、このことに直結している。

ひとつの観念の真理とは、その観念に内属する動かぬ性質などではない。真理は観念に起こってくるのである。それは真となるのである。出来事によって真となされるのである。真理の真理性は、事実において、ひとつの出来事、ひとつの過程たるにある、すなわち、真理が自己みずからを真理となして行く過程、真理の真理化の過程たるにある。真理の効力とは真理の効力化の過程なのである。…

真の思想を所有するということは、いついかなる場合でも、行為のための貴重な道具を所有していることである。さらに、真理を獲得するというわれわれの義務は、碧空から降る空白な命令とかわれわれの知性が好んで演ずる「妙技」とかなどではさらになく、すぐれた<sup>47</sup>実際的な理由によって説明されうる…。

生理学者・心理学者として、ジェイムズは、心の活動を脳にインプッ

トされた自己保存活動と結び付けて考えている。もちろん、高等な生き物の場合はそれがすべてではないにせよ、人間もこの段階で適応にしくじれば、生き物として大きなリスクを背負い込む恐れがある。<sup>48</sup>知識を活用し、生存に役立つようリスクを軽減できれば、より安全な日々を送れる。この意味で、知識は生存に役立つ有用な道具であって、この知識観を前提に改めて真理というものを見直してみれば、真理は、永遠に不動のものなどではなく、日々変化する環境に適応する道具という意味でダイナミックなものであり、昨日まで真理としてきたものも、今日はそれを虚偽とする準備を求められるものである。

ジェイムズが、真理を獲得する理由を、すぐれて実際的な理由としていっているのは、生き物レベルにおける自己保存に奉仕する有用性に関わるからに他ならない。

われわれは限りなく有用とも限りなく有害ともなりうる諸実在の世界に生きている。それらの実在のいずれに望みを囁すべきかをわれわれに告げてくれる観念が、これら第一義的な真理化の領域においては、真の観念と見なされ、そしてかかる観念を追求するのが第一義的な人間の義務なのである。真理を所有するということは、この場合それ自身で目的であるどころか、他の必須な満足を得るための予備的な手段であるに過ぎない。もし私が森のなかで道を見失って餓死しようとしているとき、牝牛の通った小路らしいものを発見したとすれば、その道を辿って行けばそのはずれに人間の住み家があるに違いないと考えるのは、きわめて重大なことである。なぜならば、私がそう考えてその道に従って行けば私はわが身を救うことになるからである。このばあい真の思考が有用であるのは、その思考の対象である家が有用だからである。<sup>49</sup>

哲学の伝統を重んじる立場からは、真の観念とは同化・有効化であ

り、確認・検証できる観念だという説明には、大いなる批判が浴びせられる。<sup>50</sup> それほど、プラグマティズムの真理観は奇異なものと受け取られた。<sup>51</sup> だが、プラグマティズムの真理観は、極めて常識的な視点に立って観念の有用性を言ったまでのものであり、永遠にして不動の真理とは対極に位置するものである。

独立な真理、われわれがただ発見するだけの真理、もはや人間の要求に応じない真理、一言でいえば、矯正のできない真理——そういう真理はほんとうにありあまるほど存在している——あるいは、存在しているものと、合理論的な心の思想家たちによって想像されている。しかしそういう真理はつまり生きている木の死んでいる心という意味しかもってはいない。それが存在しているということは、真理にもまたそれなりの古生物学があり、またそれなりの「時効」があつて、永い年月にわたって旧びるまで使役していると、真理もついにこわばつてきて、人々の心で化石化した<sup>52</sup>古物になりきってしまうものであることを意味するにすぎない。

真理は大部分が以前の諸真理から作られるというジェイズの主張を、合理論の立場から受け入れられないのは、合理論者にとって、真理は「作られる」ものではなく、発見されるべくそこに断固として存在するものだからであり、日々変化するわけではなく、永遠に不動の一者とみなされてきたからである。だが、この合理論の想い描く真理観と対抗し、ジェイズが展開するプラグマティズムの真理観は、そうした不動の真理を想定するものではなく、もっと手軽な、持っていれば便利な道具と表現される。

プラグマティズムを誕生させたメタフィジカル・クラブのメンバーであり、ジェイズの友人でもあったO・W・ホームズが、これから弁護士になる学生を相手にボストン・ロー・スクールで法について講演した

際に、法について述べた次の下りは、まさにジェイムズのこの真理観、つまり知識は有用な道具という見方と、軌を一にするものである。

法を研究する場合、われわれが学ぶものは専門技術であって秘伝などではない。それは、裁判官の面前に現われた場合に必要なもの、あるいは裁判所の世話にならずに済ませる方法をアドバイスする場合に必要なものである。人々が法律家に金を払ってまで相談するのは、こうした社会では、一定の条件下で裁判官に公権力を発動することが委ねられており、必要とあらば、判決を実行に移すため、国家の全権力が発揮されるからである。この権力に、いつ、どこまで直面するリスクに晒されるか、人々はそれを知りたがっている。したがって、法を研究する一つの目的はそのリスクを予見すること、つまり、裁判所という手段を通じ、いつ公権力が発動されるかを予測することにある。<sup>53</sup>

持っていれば危ない目に遭うことも避けられるという意味で有用な法律知識、これこそ、ホームズがここで言わんとしているものである。実用法学においては比較的容易に理解されるこの考えは、ジェイムズが真理として示したものと同一役目を果たしている。

## ジェイムズの科学論

ジェイムズが、ハーバード大学でプラグマティズムの講義をしていた時代は、決定論と目的論が君臨していた時代から、徐々に不確実性と偶然論が力を持ち始めた時代に当たる。20世紀に入ると不確定性の原理も唱えられ、ニュートンの古典力学は、その足元が揺らぎ始める。この変化は、今日の視点から、次のように描かれている。

古典科学が誕生したのは、神の秩序と自然の秩序とのちょうど中間

に位置する人間と、人間が自分と同じ姿をしていると考えた…建築家、すなわち合理的で知性的な立法者である神との盟約によって支配された文化の中においてであった。哲学者と神学者に、科学に關与する資格を与え、一方、科学者に創世時に働いた神の知恵と力を解明し、これについて意見を述べる資格を与えた文化的調和のあった時代を古典科学は生き抜いた。…

今では、ラプラスの科学は、多くの点で科学の古典的観念でしかないが、観測者は外部にあり、記述自体が原理的には世界の外部にある視点からなされるという風に客観的である。すなわち、神に似せて作られた人間の心が、最初から手に入れることができた神の視点からの記述である。…

[だが] 古典科学が今やその限界に到達した…。この変化の側面の一つは、「あるがまま」の世界を知ることは可能であるとする古典的概念の限界が発見されたことである。…しかし、乱雑性、複雑性、不可逆性など [の観念] が、実証的知識の対象として物理学の中へ入ってくるに従って、世界そのものと、われわれの行う世界の記述との直接の関係を、これまでのようになりに素朴に仮定することができなくなった。理論物理学における客観性が、より微妙な意味をもつようになったのである。<sup>54</sup>

南北戦争後にスペンサーの思想が大いにもてはやされたことが示すように、アメリカでは必ずしも信仰と科学が犬猿の仲にあったわけではない。ジョン・フィスクなどの思想家が、双方の考えを正面から対立させぬよう緩和策を示していたこともあり、進化思想が保守主義の思想とさほど相性が悪い状態ではなかった。<sup>55</sup>

時代の世俗化に伴い、人間も動物の延長線上に位置づけられるようになると、神に似せて作られた特別な名誉ある座から人間が滑り落ちるのに伴い、それまで神の高みに座って宇宙の外から出来事を描いてきた視

点も、それを維持することが困難になった。スペンサー流の決定論との格闘を通じ、ジェイムズは哲学の批判的な再検討を行い、そこから生理学・心理学の新知識を武器に、プラグマティズムというアメリカ独自の哲学を打ち出すに到った。

ジェイムズは、それまで圧倒的な支配力を発揮してきた古典科学のモデルが次第に揺らぎ始めた時期に、その知識を生理学、心理学においては積極的に活用し、自然科学としての心理学を唱えたが、同時に、彼はその限界も見据えていた。

数学や論理学や自然界における斉一性の関係、すなわち法則がはじめて発見されたとき、そのあまりの明瞭さ、美しさ、単純さに魅了されて、ために人々は全能なる神の永遠の思想を誤りなく判読しえたものと信じた。神の心もまた三段論法の形をとって鳴動し、反響するのであった。神もまた円錐曲線や平方と根や比例をもって思考し、ユークリッドと同じ幾何学の原理を用いるのであった。ケプラーの法則も遊星のこれに従うように神の造り給うたものであった。落下する物体の速度を時間に比例して増加するように定めたのも、光線が屈折すると正弦の法則に従うようにしたのも神であった。神は動物や植物の綱、目、種、属を設け、これらの間に距離を定めた。神はあらゆる事物の原型を考え、その変異形をも工夫しておいたのである。だからこれら神の驚嘆すべき設定物のどれか一つでも発見すると、われわれは神の御心のうちにあるまことの意図そのものを知ることになると考えられたのであった。

しかし科学が更に進歩を遂げるにつれて、われわれの有する法則の大部分は、否おそらくは全部が、単に近似的なものであるに過ぎないという考えが有力になってきた。のみならず、法則そのものも数えきれないほど多数となり、また科学のすべての部門においていくたの相対立する諸説がとなえられているので、研究者は、どの学説も絶対に

実在を写したのではなく、ただ或る見地からみれば有用でありうるに過ぎない、と考えるようになってきた。<sup>56</sup>

古典力学の学問的威力を広く知らしめた科学が、19世紀を通じ、自然科学の領域のみならず、他のさまざまな分野のモデルにもなると、一方ではその權威を否が応でも増すと同時に、他方では科学そのものの妥当性を再吟味する機会も増える。そこから、科学の前提に対する疑問も示されるようになる。ジェイムズは、旧来の心の研究のありようを批判し、『心理学』の冒頭でこう述べている。

過去の合理的心理学の大きな誤りは、靈魂を、固有の諸能力をもつ絶対的精神的実体として設定し、記憶、想像、推理、意志などの諸活動を、これらの諸活動が扱う外的世界の諸特質とほとんど関係なく、靈魂に固有の諸能力として説明したことであった。<sup>57</sup>

物には本当の形があると考え、真理を不動のものとする模写説を奉じてきたそれまでの視点に立ち、心理学的な思考においても、まず絶対的な精神的実体から思考を始める。このため、靈魂が思考の対象にはなっても、それが置かれた環境の影響あるいは環境との作用・反作用という関係は一切捨象され、靈魂固有の能力を冥想することに終始してきたとジェイムズはいう。この環境と断絶された絶対の存在とする旧来の見方を覆したものが、スペンサーの心理学研究である。決定論の上に築かれた目的論の性格を色濃く漂わせていたにせよ、スペンサーは、生き物の逃れ難い宿命として、己の置かれた環境の中で、周囲からもたらされる種々のリスクをかいぐる形で、身体も心も環境に適応し続けた結果、下等なものから高等なものへと多様化・複雑化し、進化してきたと考える。このように、進化は、生き物の形態である外的側面に影響するだけに留まるものではなく、当然、その内的側面に関しても同じ効果をもた

らすものである。人とは違い、動物は自動機械のレベルに留まったとしても、進化という観念を基礎に据えれば、人間の靈魂なるものも、周囲を取り巻く外的環境と全く無関係な神々しい存在であり得るはずがなく、種々のリスクを回避するよう暗黙のうちに仕組まれた機能を駆使しつつ、進化してきたものに他ならない。

スペンサーのこの進化思想は、ジェイムズにとって、旧来の心の考え方からパラダイム転換をもたらす上で、強力な足がかりを与えるものであった。自由意志の存在を希求するジェイムズが、決定論と目的論のチャンピオンの存在であるスペンサーの評価を忘れないのは、この思考転換により、スペンサーが心理学研究に新風を吹き込んだゆえである。

われわれの内的諸能力は…世界の真っ只中であって、われわれの安全と繁栄を確保するように順応しているのである。新しい習慣を形成し、順序を記憶し、事物から一般の性質を抽象して、これとその当然の結果とを結びつける能力、すなわち、この混沌と整然が混じりあった世界の中で、われわれの方向を定めるのに必要な諸能力のみでなく、情動や本能もこのような世界のきわめて特殊な諸相に順応しているのである。…心と世界は一緒になって進化してきたのであり、したがって相互に適合してきたものなのである。…このような新しい見解の主要な結果として、心的生活は元来有目的であるという信念が次第に高まった。…われわれのさまざまな感じ方、考え方は、それがわれわれの外的世界に対する反応を形作る上に役立つから現在のようなものになったのである。近年の学説の中で、心的生活と身体的生活の本質は一つである、すなわち「内的関係の外的関係に対する調節」である、というスペンサー一派の学説ほど心理学に貢献したものはあまり多くはない。<sup>58</sup>

スペンサーは、「精神とは周囲の事物の作用を通じて周囲の事物に合

うよう形成される」と述べている。<sup>59</sup>この新たな見方により、カオスの世界をコスモスとしてわれわれが把握するプロセスは、「内的関係の外的関係に対する調節」作用、言い換えれば「われわれの安全と繁栄を確保するように順応」する作用として再認識される。この進化論的な視点に向け、知識のための知識を重視してきた旧来の立場から、パラダイム転換をもたらしたことを、ジェイムズはスペンサーの心理学への偉大な功績とする。<sup>60</sup>

だが、こうしたヴィジョンの転換のために、不可避的に心の機能は、環境に順応するためのものとして、目的論的に考えられざるを得ない方向へと押しやられた。このため、スペンサーの考えは、一方では旧来の道徳哲学的な見方を離れ、心理学研究に新たな視点を吹き込む功績を残したが、同時に他方では心理学研究をもっぱら目的論の枠内に押し込める結果ももたらした。

このため、ジェイムズのスペンサーに対するイメージは、かなり複雑である。スペンサーの死に際し、ジェイムズは一文を残し、彼の功績を讃えながらも、その思想的矛盾に関し、次のように述べている。

社会主義や国家による広範な干渉に対し、スペンサー氏が個人主義を擁護する勇ましき姿を見ると、外見上の矛盾があまりにも顕著なので、氏の思想が二つの別個の源から始まり、そのいずれの理想にも忠実たらんとしてきたのではないかと思わざるを得ない。第一のものは、個人の自由に関するイギリス古来の理想であり、これはレッセ・フェールの思想においてその頂点に達する。1851年に出版された『社会静態学 Social Statics』で、氏はこれを絶賛している。第二のものは普遍的進化の理論であり、先の書の出版から十年のうちに、氏はこの考えを抱くに到ったように思える。<sup>61</sup>… [だがこれでは] 個々の事実の運命は、全体集合のそれに飲み込まれてしまう。(私の記憶に間違いがなければ)これこそ、スペンサー氏が社会の中で個人を扱う際に、

われわれが絶えず氏から受ける印象なのである。…氏は、当然、自由意志の存在を否定するし、英雄崇拜を軽蔑する。また、社会の変化を個人の独創力のゆえではなく、「一般条件」のゆえとする嫌いがある。かくして、あらゆる点で、具体的に個別的な人々の役割を最小限に押し留めてしまう。…スペンサー氏が個人に絶大な信頼を置く政治関連の著作を見れば、これとは正反対の姿勢を目にする。優れた研究者なら、氏のシステムの中に、この二つの思想の統合点を見出せるのかもしれないが、私の目では、矛盾とまでは言わずとも、少なくとも両者は結びつきはしない。<sup>62</sup>

スペンサーは、彼が奉じる進化の法則について、それを信じる「ア・プリオリな理由がある」と述べている。<sup>63</sup>スペンサーは、究極的なところは「知られざるもの Unknowable」として、決定論的な論調を薄めようとするが、彼の著作に満ちる不変・必然の法則による支配という印象は、その程度の「言い訳」ではとても薄め切れなかった。決定論に基礎を置くこの必然法則と、『個人対国家』に示されるレッセ・フェールと個人主義の礼賛とが、いずれも、スペンサーの著作に堂々と顔を出すことに、ジェイムズは困惑を抑え切れなかったのであろう。

## 哲学と科学

ジェイムズは、『心理学』の冒頭において、心理学を一自然科学として扱うことを明言した上で、それにつき一言の説明が必要であると述べている。ここに、ジェイムズが、生理学、心理学だけに限定せず、科学一般を、哲学との関係でいかなるものと見ていたかが示されている。

ジェイムズは、さまざまな諸科学を根底においてはただ一つのものとして想定し、すべてが知り尽くされるまで何一つ完全に知ることはできない、と考えることを拒否する。それは、科学が、各々の場所でそれぞれ

の便宜的理由から発達してきたものであるがゆえ、それらの間の互いに  
 関連性のない知識を、「諸科学 sciences」として別個に研究すればよい  
 と考えるからである。しかも、諸科学は、自らの問題のみに固執し、他  
 の問題は徒に視野に入れるべきではないとも言う。その上で、諸科学の  
 探求した知識を一つに統合し、その真偽の吟味は哲学に任せるべき仕事  
 とした。<sup>64</sup>

つまり、各分野の実際的な理由から発展してきた科学は、それぞれの  
 法則に従い、他を気にせずその分野だけの範囲で知識を、決定論を前提  
 として探求すればよく、それらの知識の全体を統合する力もなければ、  
 その必要もないというのである。なぜなら、それは科学が自らに課した  
 課題でもなければ、科学が良くこなさうる仕事でもない、とジェイムズ  
 は考えるからである。

有意的生活 voluntary life の全場面は、相争う運動性の観念に注が  
 れる注意の量のごくわずか多いか少ないかによって決まる…。しかし  
 ながらすべての現実感、有意生活のすべての刺激と興奮を左右するも  
 のは…物事がその時々実際に決められつつあるという感じである。  
 …この感じは…幻想ではないであろう。努力はあるオリジナルな力であ  
 って単なる結果ではないであろうし、その量も定まっていないもの  
 かも知れない。[それが分からないのは]この力があまりにも微妙で、  
 細かく測定できないからである。しかし、心理学は「科学」であろう  
 とする以上、他の諸科学と同じように、その諸事実に関して完全な決  
 定論を要請しなければならない。その結果、たとえ自由意志のような  
 力があるにせよ、心理学は自由意志の効果と袂を別たねばならない。  
 私も、他の諸心理学者と同じように、ここでは自由意志を棄てよう。  
 但し、こうしたやり方は、事実を単に「科学的」形式に配列しようと  
 する学問的必要性からは認められる方法上の工夫であって、自由意志の  
 問題に関する究極的真理については何も解決しないことを承知した上

でのことである。<sup>65</sup>

科学は、自然法則に支配される対象を、決定論を前提として探求する学問の一方方法であって、それ以上でも以下でもない。したがって、心理学としての科学は、意識状態の因果的解明が課題となり、「心的活動は常に脳の活動の完全な関数であって、脳の活動の変化に伴って変化し、脳の活動に対しては原因に対して結果の関係にあたる、単純で徹底した考え方<sup>66</sup>」を採る。したがって、自由意志の有無という問題は心理学には解けないし、また心理学はそれを解く義務も課されない。

こうした前提条件を付した上で、ジェイムズは、科学としての心理学の知識を、暫定的に最大限に活用する。それは、科学的探究の限界を見据えた上で、知識が、生命体の自己保存という第一義的な目的にとって有用であることを重視する姿勢から生じる。<sup>67</sup>

私は、出発点において躊躇することなく、脳の状態と心の状態との間に一定の相関関係が存在するのは自然の法則であると仮定する。…ある読者にはこのような仮定は最も道理にあわない先験的唯物論のように見えるかも知れない。ある意味においてこれは確かに唯物論である。… [だが] 生理学の「作業仮説」によると、脳の活動の法則は根本においては機械的法則であるから決して考えの本質まで機械的法則によるとは説明しないのである。この後半の意味においてわれわれの主張は唯物論ではない。<sup>68</sup>…

真理を不動のものとは考えないジェイムズは、科学の知識に誤る危険性が付きまとうことに、とりわけ驚きもしない。仮にそこに行き過ぎがあったとしても、科学の進歩には常にこうしたリスクはつきものだと考え、その進展はいつもジグザグに行われてきたという。したがって、心理学も唯物論の方向に思い切り進ませ、後の研究の中でそれを修正すれ

ば事足りると考える。そうした後に、心理学的知識が哲学の全体系の中に取り込まれるようになった暁には、それが非常に異なった意味をもつようになるという。<sup>69</sup>

科学を役に立つ仮説とみなすドライな感覚を基礎に、それを究極まで追求する中から、哲学が関与する余地が表れてくる。こうした視点に立ち、ジェイムズは、それまで支配的であった道徳哲学に代わり、科学を知識の中心に据えるとともに、決定論的な科学的知識を安直に絶対とみなすことを拒み、自由の探究のための余地を確保せんとした。

## ジェイムズと革新主義

20世紀初めのアメリカにおいて、レッセ・フェールから福祉国家を目指した革新主義の特徴は、次のようにいうことができよう。

レッセ・フェールの批判者たちは…国家が一般的福祉を最もよく促進し得るのは、国家が持つ権力を肯定的なやり方で発揮する場合であると考えた。彼らは、民主的國家を邪悪な力とは考えなかった。彼らは民主的國家を、人々が共通する利益を増やし、自分たちがその下で生活し働くための条件を改善し、自分たちの健康と安全を守り、ある程度まで自分たちの社会的・経済的安定を確保するために活用が可能であり、また活用せねばならない道具とみなした。彼らは、政府の権力は、悪を抑制する消極的意味においても、善を促進する積極的意味においても考えられるとし、政府の抑圧的な役割は、時の経過とともに次第に縮小し、それに応じて肯定的で改良主義的な役割が増大すると考える傾向を示した。彼らは自らの時代に向け個々の改革も提唱したが、概して彼らは、一般的福祉國家をあれこれの役割によっては考えず、國家は、自らの行為で福祉全般が増大すると考える場合はいつでも行動しなければならないとする立場をとった。

レッセ・フェールの支持者とは異なり、一般福祉国家の提唱者たちは、自分たちが生きる産業社会においては、自由を実際に確保するためには国家の行為が不可欠であると考えた。南北戦争以前のアメリカの自由主義者たち liberals が、自由の消極的な面に関心を有していたのに対し、一般福祉国家の提唱者たちは、自由主義の信念の積極的な面を強調した。<sup>70</sup>

ジェイムズは、後の革新主義者ほど社会改革に熱心ではなかったにせよ、革新主義に向け理論的基礎を築いた人物の一人である。彼の基本姿勢は、哲学者は巣穴にこもる野生動物のごとくあるべしという信念に端的に示されている。個人の意識的努力に大きな意味を持たせる習慣論が示すものは、彼があくまで個人主義を重視し、パターナリズムは好まなかったことを暗に物語っている。このため、社会の大規模な改革に向けた革新主義の議論は、デューイらの手に委ねられることになる。

- 1 208 U. S. 412 (1908). 1903年、オレゴン州議会は、クリーニング業で働く女性の最長労働時間の上限を1日10時間に定めたが、このオレゴン州法の合憲性が争点になった事件。N. Woloch, *Muller v. Oregon: A Brief History with Documents*, p. 3. (1996, Bedford). 連邦最高裁が、*Lochner v. New York* 事件 (1905) で、ニューヨーク州労働法に違憲判断を下してほどなく、オレゴン州ポートランドにあるカート・ミュラー・ランドリーが、州の10時間労働法に違反したかどで有罪とされ、罰金10ドルが言い渡された。1906年、オレゴン州最高裁は同法を合憲と認定し、翌年、連邦最高裁でこの事件が争われた。連邦最高裁は、オレゴン州の労働時間制限法を合憲とした。
- 2 Woloch, *Muller v. Oregon*, pp. 28-33. この趣意書に関し、裁判所には、裁判所が議会のごとく振舞うべきではなく、権限を逸脱しているとする非難が寄せられた。ベネディクト/常本訳『アメリカ憲法史』pp. 136-37 (1994). この点は、裁判所にいかなる権限があるのかとの関係において今なお議論の対象となる、革新主義が抱える問題点の一つである。
- 3 この趣意書の科学性に関して、ホーヴェンカンブは次のように批判してい

る。「Muller v. Oregon (1908) 事件では、当時は弁護士であったルイス・ブランドイスが、女性の労働は、男性労働者には適用されない類の外部効果に服するものであることを、最高裁に認めさせた。この弁論により、女性の10時間労働規制法は、3年前のロックナー事件に照らし、ほぼ確実に違憲と目されていた状況から救われることになった。Muller 事件で有名になった『ブランドイスの趣意書』は、法と雇用に関する女性の立場を社会科学のデータで裏づけたものとされる。だがこれは、同法を制定したことが理に適っていることを最高裁に納得させる点に狙いを定めたものであって、趣意書そのものは、華々しいレトリックを装ってはいても、内容は奇妙な情報のごった煮に過ぎない。」Hovenkamp, *Enterprise and American Law*, p. 202.

- 4 L. Fink, *Progressive Intellectuals and the Dilemmas of Democratic Commitment*, p. 13. (1997, Harvard).
- 5 エリック・フォーナー『自由の国アメリカ』上 pp. 14-15. (2008, 岩波書店). 岡崙修「アメリカにおけるリベタリアニズムの伝統」『朝日法学論集』38号 (2009).
- 6 Dorothy Ross, *The Origins of American Science*, ch. 4. (1991, Cambridge). Robert Green McCloskey, *American Conservatism in the Age of Enterprise, 1865-1910*.
- 7 Dorothy Ross, *The Origins of American Social Science*, pp. 99-101.
- 8 Fine, *Laissez Faire and the General Welfare State*, pp. 96-97. ガットマン/大下ほか訳『金びか時代のアメリカ』(1986, 平凡社). ベットマン『金びか時代の民衆生活』(1999, 倍風館).
- 9 Fine, *Laissez Faire and the General Welfare State*, pp. 98-99.
- 10 Fine, *Laissez Faire and the General Welfare State*, pp. 100-02.
- 11 ホフスタッター/後藤訳『アメリカの社会進化思想』p. 7 (1973, 研究社). ニューディーラーであるホフスタッターは、当然、レッセ・フェールの支持者には批判的であるが、ウィリアム・サムナーに関しては、次のように述べ、必ずしも金持ちの支持者として描けないことを示唆している。「サムナーと同じような考えの人たちは、たとえ人間の不幸を、冷淡に、どう仕様もないほど徹底した独断的な確信を持って考えているように見るとしても、高度の鍛練に対する専念が必要な場合には、自己に対しても厳しい教師になる傾向を持っているということも、同時に認められなければならない。この意味では、かれらは言行一致の美德を持っていた。サムナーはイェール大学での自分の地

プラグマティズムと革新主義の時代

- 位を三度まで危険にさらしながら、論争における少数者の立場を頑強に主張し通した——その一はスペンサーの著作を教材として使用したこと、その二は保護関税に反対したこと、その三は米西戦争を非難したこと、である。そして、この人たちの思想の実際上の結論がつねに財閥の喜ぶところとなったにしても、こうした思想傾向の人たちは単なる財閥弁護論者ではなかった。またかれらにとってもっとも大切な価値が、財閥の価値と同じものだということもできない。」『アメリカの社会進化思想』 p. 13.
- 12 Daniel J. Wilson, *Science, Community, and the Transformation of American Philosophy, 1860–1930*, pp. 2–3 (1990, Chicago).
- 13 19世紀前半のイギリスにおいて、科学が改革の武器として用いられたことについては A. Desmond, *Politics of Evolution: Morphology, Medicine, and Reform in Radical London* (1989).
- 14 R. Bruce, *The Launching of Modern Science 1846–1876* (1987).
- 15 Bruce, Id., pp. 29–30
- 16 Wilson, *Science, Community, and the Transformation of American Philosophy*, p. 2 アメリカでは、この時期に社会諸科学が次々と独立した。20世紀になって哲学の領域を支配するものが、論理実証主義と分析哲学となる。
- 17 Wilson, *Science, Community, and the Transformation of American Philosophy, 1860–1930*, p. 38.
- 18 Fine, *Laissez Faire and the General Welfare State*, p. 280. ジェイムズは、1860年代にはハーバート・スペンサーの称賛者であったが、チャールズ・パースがスペンサーの『第一原理』を批判したことに影響を受け、1872年にバードで講義を始める時点では、スペンサー批判に転じていた。彼は、当時、講義に用いることに批判もあったスペンサーをハーバードでのテキストを用いているが、それは哲学上の誤りを示すための反面教師としてであった。ジェイムズは、個人的にはスペンサー・ブランドの個人主義に魅力を覚えつつ、スペンサーの宇宙規模の運命論に従いたいとは思わなかった。Fine, Id., 280–81.
- 19 William James, 'Remarks on Spencer's Definition of Mind as Correspondence' in *The Works of William James: Essays in Philosophy*, p. 21.
- 20 William James, *The Works of William James: Essays in Philosophy*, pp. 18–19.
- 21 James, Herbert Spencer, in *The Works of William James: Essays in Phi-*

- losophy, p. 108.
- 22 Fine, Laissez Faire and the General Welfare State, p. 282. 社会ダーウィン主義は、ダーウィンの発案であるかのような言い回しが用いられるが、ダーウィンの『種の起源』が出版される1859年以前に、すでにスペンサーなどの著作で表明されているもので、必ずしもダーウィンの考えに基づくものではない。
- 23 Fine, Id., p. 283.
- 24 Fine, Id., p. 281.
- 25 Fine, Id., pp. 283-84.
- 26 ジェイムズ/今田訳『心理学』上 pp.136-37. (1993, 岩波文庫). ジェイムズの心理学には、記述面でスペンサーの影響と思しきものが見られる。「ショッキングな物音や光景に接すると、感覚器官や神経は影響を受ける。飛び上がり、悲鳴を上げ、顔が歪み、筋肉全体の弛緩から震えが生じ、激しく発汗し、心臓の鼓動が激しくなり、あるいは逆上して心臓の鼓動が止まったり卒倒を起こしたりする。もし身体が弱ければ、気分が悪くなり、多くの複雑な症状が現われて来る。」スペンサー/清水訳「進歩について——その法則と原因」(1857年)『世界の名著46: コント・スペンサー』p. 429 (中央公論社)
- 27 ジェイムズ『心理学』上 pp. 136-37. このような脳の研究は、19世紀前半におけるフランスのポール・ブローカによる失語症の研究に、その多くを負っているジェイムズは述べている。
- 28 ジェイムズ『心理学』上 pp. 240-41.
- 29 ジョン・デューイ/清水訳『哲学の改造』pp. 109-110. (岩波文庫)「〔伝統的哲学で〕認識を考える場合、絵を描いている画家をモデルとせず、完成した絵を眺めている鑑賞者をモデルとしがちである。ここから、認識に関する一切の問題が生じている。それは、問題がすべて、一方にはひたすら眺めるだけの精神を、他方には眺められるだけの対象を想定することから生じるためである。ものを知るというプロセスには、常に、能動的な営みが含まれるのである。」
- 30 心をその「構成単位」から「構築する」ことには、説明上の優雅さという利点はある、それによって整然と整理された目次をつくることはできるけれども、この利点はしばしば現実と真実を犠牲にして獲得できるものである。…意識を細分した「要素」を死後解剖的に研究するよりも、われわれに与えられたままの具体性をもって意識状態全体にできる限りの注意を払うことに

## プラグマティズムと革新主義の時代

よって、実際には心をより生きた状態で理解できるものと考えているのである。この細分された要素の死後研究は、人為的抽象による研究であって、自然事物の研究ではない。ジェイムズ『心理学』上 pp. 6-7。これは、パースによるデカルト批判と同じ視点を示している。C. Peirce, Fixation of Belief, in Collective Papers of Charles Sanders Peirce, vol. 5. 365.

- 31 ジェイムズ『心理学』上 pp. 242-43.
- 32 ジェイムズ『心理学』下 pp. 178-81. [引用の順序を一部で逆にした。]
- 33 ジェイムズ『心理学』上 pp. 188-89.
- 34 ジェイムズ『心理学』上 pp. 189-200.
- 35 ジェイムズ『心理学』上 pp. 191-92.
- 36 ジェイムズ『心理学』上 pp. 192-94.
- 37 ジェイムズ『心理学』上 p. 199.
- 38 ジェイムズ『心理学』上 pp. 200-01.
- 39 ホフスタター/後藤訳『アメリカの社会進化思想』p. 165「ジェイムズは、プラグマティズムの伝統をさらに受け継いだデューイとちがって、組織的ないし集産主義的社会改革に最小限の関心をいдаくという過ちを犯した。ジェイムズの基本的個人主義の特徴の一つは、時たま時事的な問題に関心を持ちはした——反帝国主義者、ドレフユス支持者、批判的超自然主義者として——けれども、そういう主義を奉ずる者として、持続した関心を社会理論に持ち続けなかったことである。ジェイムズはつねに個人との関係で哲学上の問題を論じた。」
- 40 ホフスタター/後藤訳『アメリカの社会進化思想』p. 165 (1973, 研究社).
- 41 ジェイムズ『心理学』上 pp. 202-03.
- 42 M・ホーウィッツ/樋口訳『現代アメリカ法の歴史』p. 4. (1996, 弘文堂).
- 43 ジェイムズ/柘田訳『プラグマティズム』p. 176 (1957, 岩波文庫).
- 44 「われわれイングランド人は、理論上、現行法を一字一句たりとも変えることのできない機構を用いながら、法が拡張され、修正され、改良されることに慣れている。この事実上の立法はこっそりと行われるために、ほとんど人に気づかれない…。われわれは、目下係争中のケースの事実をカバーする既存の法的ルールは必ずどこかにあるという考えを、当然のものと考えている。このため、たとえそのようなルールが見つからなくとも、それは単に、そうしたものを見つげるために必要な忍耐力、知識、洞察力を欠いているとしか考えない。だが、判決が下され書き記された瞬間から、われわれは、無意識

- 的にあるいは否応なしに、新しい言葉や新たな考えへと導かれるようになってゆく。そして、その後になって、ようやく、この新たな判決が法を変えたことに気づくことになる。」Maine, *Ancient Law*, p.30. (1861, 1970, Peter Smith).
- 45 ジェイムズ『プラグマティズム』pp.145-46. 西洋哲学のこの伝統を、彼は壁に掛かる時計の例を用い、批判的に検討している。眼を閉じ壁にかかる時計を想えば、文字盤の真の像ないし模写が思い浮かぶ。時計内部の「仕掛け」でも、まだ模写説で間に合わせることができる。だが、時計の「時間測定作用」やゼンマイの「弾力性」となれば、模写といっても、何を模写するか正確に知ることは困難になる。
- 46 ジェイムズ『プラグマティズム』pp.145-46.
- 47 ジェイムズ『プラグマティズム』pp.147-48.
- 48 ジェイムズ『心理学』上 p.26.
- 49 ジェイムズ『プラグマティズム』p.148.
- 50 かつてこうした真理の説明をしたF・C・S・シラーが、合理論の擁護者から「まるでぶんなぐられてよい生意気な生徒」のごとき扱いを受けた、とジェイムズは述べている。ジェイムズ『プラグマティズム』p.55.
- 51 真理は、その圧倒的多数は自らの検証を経ていないものであるにも拘らず、われわれはそれを頼りに生きていることを見れば、真理は一種の信用組合のごとき様相を呈しているという。ジェイムズ『プラグマティズム』pp.151-52.
- 52 ジェイムズ『プラグマティズム』p.53.
- 53 O. W. Holmes, *The Path of the Law*, 10 *Harvard Law Review*, 457. (1897)
- 54 プリゴジン&スタンジェール/伏見ほか訳『混沌からの秩序』pp.95-99 (1987, みすず).
- 55 ホフスタター『アメリカの社会進化思想』pp.22-23
- 56 ジェイムズ『プラグマティズム』p.47.
- 57 ジェイムズ『心理学』上 p.24 (1992, 岩波文庫).
- 58 ジェイムズ『心理学』上 pp.24-25.
- 59 スペンサー/清水訳「科学の起源」(1854年)『世界の名著46:コント・スペンサー』p.346 (中央公論社).
- 60 James, 'Remarks on Spencer's Definition of Mind as Correspondence', in *The Works of William James: Essays in Philosophy*, pp. 7-22.

- 61 「今日あらゆる事象に見られる結果の増大は古くから行なわれて来たもので、宇宙の最も重要な現象に関しても最も些細な現象に関しても、等しく当てはまる。事物が絶えず複雑さを増して来たことは、能動的な力はすべて一つ以上の変化を生ずるという法則から必然的に帰結する。原因はすべて一つ以上の結果を生ずるという根本的事実から出発するならば、同質から異質への不断の変化が天地万物を通じて行なわれて来たこと、今もなお行なわれていることは容易にわかる。」 スペンサー/清水訳「進歩について——その法則と原因」(1857年)『世界の名著 46: コント・スペンサー』p. 422 (中央公論社)。これらのスペンサーの著作は、いずれもダーウインの『種の起原』(1859年)に先立って出版されたもので、しかも、ジェイムズが言うように、ダーウインの影響力は大衆にまで及ばなかったのに対し、スペンサーは、大衆に到るまで直接的な影響を及ぼしている。James, 'Herbert Spencer Dead', in *The Works of William James: Essays in Philosophy*, p. 96. (1978, Harvard).
- 62 James, 'Herbert Spencer Dead', in Burkhardt ed., *The Works of William James: Essays in Philosophy*, p. 99. (1978, Harvard).
- 63 同 p. 431.
- 64 ジェイムズ『心理学』上 p. 22.
- 65 ジェイムズ『心理学』上 pp. 330-31. 一部訳文を変えた。
- 66 ジェイムズ『心理学』上 p. 27.
- 67 ジェイムズ『心理学』上 p. 26.
- 68 ジェイムズ『心理学』上 p. 28.
- 69 ジェイムズ『心理学』上 pp. 24-29.
- 70 Fine, *Laissez Faire and the General Welfare State*, pp. 167-68.